

## 貝紫の刻（とき）

どのような潮に導かれ、この小さな入り浜に流れ来たのか？  
小さな巻き貝たちよ、

夜明け前の、微睡<sup>まじろ</sup>みの渚にうち上げられ、

傷ついた触角をもてあます。

漆黒に沈む海の静寂はやがて、苦渋の色に染まり、  
さわぎはじめた「上げ三分の潮」に揺られるメバルさながら  
こころの闇間を私は、界面反射に惑いながら

垂直に漂う。

誰にだって

あるさ……

## 言葉のあや織り

頭脳の 迷路の奥に追いはらった  
いつまでも清算されない 食い違いの記憶  
夜ごとの海で水葬にふしたはずなのに  
自然界では生まれない色素をひそかに生合成し  
目ざめ間際を染めようとする

月に日に 晒しても

褪せるどころか 色ことさらに浮き立ち

貝紫によどむ 思いの澱

銀のマドラーで そっとかき乱し

奪い去られる光沢に 目を凝らす

朝日さし 夕日さしても

屹立もせず文机に 砂時計は転がり

青い砂漠を流浪する 海馬の足あと

たぎる水脈の 冷める場所をもとめ

「さまよえる湖」の、蜃気楼を追う

古い地層の 土金属イオンに銀化され

やがても活断層に顕れた 見まがう古代ガラス

朝ごとの竈で炎の儀式に奉ったはずなのに

人の手では創れない燦めきをひそかに化合し

迷い人の脳裏にオーロラを啓示する

「もしも」と  
ひと言 口にしたなら  
いつさいが逆夢になってしまう

眼球の裏側に隠匿した 私の時間が  
あるいは  
きみの記憶のすべて かもしれないが

水に落ちた野生ならば  
岸辺に這い上がり 身をふるわせ  
まといつく水を 振り払うだろう

けれども、こころ彩るものを  
消しゴムを使うように  
拭き消すことは できない

悶黄した落ち葉は  
古いノートに挟みこみ  
滲みかけた文字群に連ねよう

ことばが射抜く 不都合な果実たち  
あるいは磔刑に処された 炎の記憶

咀嚼し嚙下するのも ままならず  
青い砂漠に  
かりそめの雪 ふりつむり  
砂時計はガラスの縁に

くずれ  
落ちる

長い物語が、  
はじまるだろう。